神秘的マホメット教

白川龍太郎

スウフィズム Sufism はマホメット教の神秘派なり。その主なる典籍が波斯(ペルシヤ)語を以て書かれたるが故に、始めは印度思想の波斯に入り波斯より更にマホメット教國に弘まれるものとせられしも、トーラックの研究に由りて、かゝる想像の根據なき事、その全然マホメット教内の所産にして教祖逃走(ヘジラ)後二世紀の始め、既にアラビヤに起れるものなる事を知り得るに至れり。

スウフィズムの信仰によれば、人心はその度に於て無限の差別あれど質に於ては平等なり、その心は神の心の一部にして竟には之に攝せらるゝもの也。神は宇宙に遍在する靈にして、神のみが圓滿なる愛、完全なる智、無垢なる美なり。神を愛する事のみが純正の愛にして自餘の愛は迷妄なり。無始の永劫より無終の永劫に亘りて至高の愛吾等の上に働きて幸福を與へ、また幸福を得るの道を與ふ。而して吾等と神との間に結ばれたる人格的約束に於て各自の分を盡す事のみが幸福を得る唯一の道なり。心靈の外には純然たる絶對の存在なし、所謂物質は神てふ藝術家が不斷に吾等が心裡に描き出づる樂しき繪に過ぎず。吾等はかゝる幻に愛着すべからず、たゞ神にのみ愛着すべし。吾等神に在りて生くる如く、神は亦吾等の中に在り。神と離れたるこのわびしき狀態に在りても吾等は尚天上の美を念ひ、太初の誓を忘るる事なし。妙なる音樂、そよ吹く風、郁々たる花、これ等は恒に天上の美の觀念を新たにし、忘れむとする太初の誓を憶ひ起さしめ、吾等をして幽婉の情に醉はしむ、吾等はこの情を失ふ可からず、一切の虚榮を厭離して神を欣求す可し、神と一なる時、こゝに無上の歡喜ありとする也（井リヤム、ジョーンス全集第四卷二一二頁）。

スウフィズムの思想は直ちに波斯に淵源せるに非ざるはトーラックが言の如くなりと雖も、後年マホメット教徒が波斯及印度を征服するに及んで、兩國の思想がスウフィズムの信仰並に文學に、大なる影響を與へたるは拒む可からず。然れども外部よりスウフィズムに向つて最も大なる刺激を與へたるは東方基督教なり。アラビヤに於ては紀元三世紀の頃、已にプラトー、アリストートル、及歴山註釋家の著書の飜譯ありて、新プラトー派の哲學及グノスティック説は廣く東方に行はれたりき。スウフィズムは約翰の基督教、又は宗教的プラトー派及グノスティックの基督教を根幹とし、之に加ふるに彼等が希臘のモゼスと呼びたるプラトーの哲學を以てせる神秘的マホメット教と云ふを妨げず。その一(ワン)と多(メニー)を説き、非有を説き、エクスタシー及直觀を説くは、之をプラトー又は新プラトー説より學べりと解すべく、殊に人間美を以て感覺の世界と觀念の世界とに架け渡たされたる橋なりとし、愛を刺激して人を眞美の大洋に導くものとなせるは、明かにプラトーのファイドロスの説を採れるもの也。

基督教の影響に關しては井ンフィールドの緻密なる考證あり。氏はスウフィズムの典籍中に直ちに福音書より藉り來れる多くの章句ある事を指摘し、その眞理、道、普遍の理、遍在の靈、恩寵、及愛等の語が基督教に於けると同じ意味に於て用ひられたるを示せり。次に掲ぐるは極めて有名なる、而も作者の知られざるスウフィズムの詩集に收められる一篇なり。之を讀まばその信仰が全然基督教の神髄を掴めるを知る可し。

基督教とは何ぞ、汝之を知るや。吾汝に告げむ。
そは汝の我(エゴー)を掘り盡し、汝を神に至らしむるものなり。
汝の心は僧院なり、その中に一如住(ワンネス)へり、
汝はエルサレムなり、永遠(イターナル)こゝに祀らる。
神の靈は汝の靈に靈火を與ふ、
彼は薄き面帕(かつぎ)を被りて汝が靈の中に動けり、

「道」第25号（1910.5）

汝若し聖靈に救はれなば、
神の神殿に永久の安息を得む。
一切の愛欲を鎮めたる人は
耶蘇の如く天上に至らむ事疑なし。

マホメット教徒にして斯の如き信仰を最初に表白せるものはラビヤ Rabia と呼ぶ婦人なりとせらる。ラビヤは教祖匪走(ヘジラ)後一三五年に死せる未婚の女なり。アラビヤの傳記家が傳ふる、ラビヤの生涯は、直ちに基督教の諸聖徒の生涯と云ふを妨げず。吾等は今逸事の二三を錄す可し。

ラビヤは中夜に獨り屢々屋上に登りて、神よ、晝の喧囂は鎮まれり、戀する男女は深閨にさゞめ言せり、されば吾はこゝに獨り汝と偕に在るを樂しむ、汝こそは吾誠の戀人なれと私語せりと傳へらる。又ある時岩の間を往きけるにラビヤ泣いて曰く、神を見まほしき哉、石も神なり、地も神なり、されど尙神を見んと吾心惱むと。其時神ラビヤの心に告げ給はく、ラビヤよ、昔モゼスの神を見むと願ひし時、

たゞ山上に吾が神威の一端の下りしのみなりしを聞かずや。されば吾が名を聽いて滿足せよと。また或人の結婚を求めたるに向ひて、吾が內心は已に婚せり、吾は死して神に歸れるもの也。されば吾は全く神の心に從はざるべからず、否吾は全く神のもの也。吾を花嫁とせん人は之を吾に求めずして彼に求めよと答へたと云ふ。當時アラビヤにハッサン、バスリ Hassan Basri と呼ぶ有名なる神學者ありき。一日ラビヤに問ふ、如何なる道により如何なる手段によりて君の如くなるを得たるか。ラビヤ答ふ、一切を失ひて神に歸れり。ハッサン復問ふ、如何なる道により如何なる手段によりて神を知り得たるか。ラビヤ呼んで曰ふ、ハッサンよ、子はある道により或る手段によりて神を知る。されど吾は道なく手段なしに神を知ると。ラビヤ病みて床に在りし時、ハッサン及シャキク Shakik と云へる他の神學者連立ちて之を訪ひたり。ハッサン曰く、神の呵責を堪ゑ忍ばざる人は、祈りて誠ならざるもの也と。シャキク曰く、神の呵責を喜ばざる人は祈りて誠ならざるもの也と。ラビヤ曰く、神を見て、ろの呵責を忘れざる人は祈りて誠ならざるもの也と。またラビヤ病みて篤かりし時、病の由來を問へる人あり、ラビヤ答ふ、吾れ天國の歡樂を想ひつゝありき、故に神吾を罰し給へり、心のいたみ吾を疾ましむ、神と偕なるに非ざれば病愈ゆる事なしと。その他ラビヤの信仰、ろの神我合一の心境を示す逸事は枚擧に遑あらざる也。

ラビヤの信仰は全然ろの衷心より湧き出でたるものにして何等外來の影響を認むる能はず。ろの思想に於ては明かにスウフィズムの先驅たれども、之を一宗として組織せるはやゝラビヤに後れて出でたるアブ、サイド、アブル、チェイル Abu Said Abul Cheir なり。ろの後九世紀の末葉に至りスウフィズムは分れて兩派となれり、一はアブ、ヤシード、アルブシャーニ Abu Yasid al-Bushāni を祖師とするものにしてろの汎神的思想はコラーンと相容れず、一はジュナイド Junaid を奉ずるものにして正統的マホメット教との調和を圖るもの也。此後に出でたる有名なる人々はセナーイー Senāī、フェリッド、エッディーン、アッタール Ferid eddin Attar、ゼラール、エッディン、ルーミー Jellāl eddin Rūmi、ジャーミー Jāmī 等にして、波斯語の著作あり。ろの他アラビヤ語の著作あるオマル、イブン、エル、ファリード Oman ibu el Farīdh、イッヅ、エッディン、ムタッデシー Izz eddin Mutaddesī、及び土耳古語の著作ある二三の人あり。

スウフィズムの名稱の由來に就ては種々の異論あれど、羊毛を意味するスウフ sūf てふ語に出でたりとするを穩當とす可し(スプレンケル一、二六二頁)。蓋し彼等が常に白羊毛の服を裝へるより此名を得たるものなる可し。今日に於てはスウフィズムの代りに、ファキール Fakīr 又は波斯語にてダルヰーシュ Darwish と云ふ名弘く行はる、共に貧者の義なり。彼等は又アーリーフ Ārif 即神智論者、若くはアール、アリヤキ

ン Ahl alyakyn 即斷乎たる人々と呼ばれたりき。蓋し直觀に由りて神と接し、疑惑なき動搖なき境地に住せるを以て也。

彼等はかくの如く靈の眼を開いて神を直觀し以て浩蕩の境に遊び得る事を信じ、且苦行を以て之を得るの善方便と思惟せり。此苦行は當初に在りては飲食にりの他の肉慾を斷つにすぎざりしが、後には極めて矯激なるものとなれり。りの甚しきに至りては印度の婆羅門僧に劣らざる苦行を敢てせしも、アッタール及びゼラール、エッディン、ルーミーの如きは、りの愚劣なるを知りて苦行を斥けたりき。眞正なるスウフィズム教徒は單にりの才能のためのみならず、りの聖者の如き生涯の爲に常に深重なる尊敬を受けたり。マクスミュラー氏は之を西歐基督教内の諸聖徒、例へば聖ベルナルドの如き人に比するも毫も遜色なき多くのスウフィズムの信者ありとなせり。ゼラール、エッディンは其の信者を歌ひて曰く、

彼等は信に篤けれど、天國を得ん爲にはあらず、
神の意志のみが彼等の信仰の唯一の獲物なり。
地獄を怖れて罪より遠かるにあらず、
たゞ神意に從はざるを得ざるが故也。

彼等は感情に信頼せり、彼等は神を觀るの直覺を有せり、或は少くとも之を有すと信せり。彼等は端的に神の現前を感じ、地上に於ける無上の福樂は人の神との神秘的合一に在りと感せり。彼等はこの境地を表白するに驚く可き豊富なる譬喩を以てせしが、尚ほ言詮の盡し難きを嘆じて、花園に摘みたる薔薇の花の香氣郁々たるに醉ふて、之を友に贈らんとするに、色褪め匂去るが如しと云へり。

ゼラール、エッディンりの著メスネヰ Mesnevi（井ンフィールド英譯）に序して曰く、此書は異常なる物語、美はしき格言を載す。こは篤信の人の蹈むべき道、敬虔なる人の住ふべき園、語は短かけれど意は長し。りは信仰の根の根を說き神人合一及確たる智慧の神秘を說くと。此書はマホメット教徒がコラーンに

次ぐ至寶として尊崇する品なれどりの思想に於ては兩者の間に天地の懸隔あり。コラーンに現はれたるマホメットの神は舊約の神なり。アラーは主として權威の神、强大なる超在的人格神なり。彼は畏るべくして近づき難き神なり、其の宗教とは神の意志に服從する事にしてイスラームの語義は神への屈服の意なり。メスネヰに現はれたるゼラール、エッディンの神は約翰の神、若しくはプロティノスの神にして著しく汎神的なり。マホメット曾て曰く、後年吾が民は七十三の分派に岐る可し。りの中に正しきものはたゞ一あるのみと。スウフィズムはりの正しき一つと言ふを得ざる也。

スウフィズムの中には世界に誇る可き多くの詩人あり。ハフィッ Hafiz の如きりの最も有名なるものにして、エマソンは天才を以て彼を呼べり（全集四卷二〇一頁）。英譯よりりの二三を直譯せんとせしも、餘りに紙面を費やすを恐れて今は之を止めたり。若し機あらば之を紹介すべし。

吾等は既に極めて無秩序ながらもスウフィズムの大略を述べたり。スウフィズムは殆ど基督教と云ふを妨げず。少くともプラトー及新プラトー哲學を基礎とせる精神的基督教と同一の信仰を有す。スウフィズム信者自身は決してこの斷定を拒まざる可し。彼等は常に耶蘇を至高のオーソリティーと呼び、新約の言語を自在に使用し、舊約の神話を借用す。若し今日に於て而く相敵視する基督教と回々教（殊に前者が后者に對する態度は偏狹且嚴酷を極むると雖）とが他日手を握るの時ありとせば、スウフィズムこそ兩者相會し相知り相助くる最良なる共通の地盤たる可し。（主としてマクスミュラーに據る）。